■善い種を蒔く与える人、悪い種を蒔く奪う人

修正：　2019.02.01

投稿：　2019.02.01

●善い種を蒔く与える人、悪い種を蒔く奪う人①

自分が他人にした**善い行い**については

詳細に至るまで割と鮮明に覚えている一方で、
自分が他人にした**悪い行い**については
まったく身に覚えがないといったように、
都合よく生きているのが私たちです。

しかし、覚えていようがいまいが、
種を蒔いた以上、やがて芽は出ますから、
「自業自得」や「因果応報」の形で、
いつの日か、摘み取らなければなりません。

それが善い芽なのであれば、喜んで摘み取りたいところですが、
逆に悪い芽であった場合は、**「ふざけんな、なんで俺がこんな目に！」**と、
種を蒔いたことを無視して、反発したくなるものです。

長年の努力が実り、社会人として成功を収め、
「ぜひとも成功の秘訣を教えてください！」
とでもインタビューされれば、

「まぁ、努力ですね。誰にも見向きされないところで、
　かくかくしかじか、…、あーだこーだあーだこーだ、…、」
と「種を蒔いたからこそ今がある！」と饒舌に語れるものです。しかし、

逆に、自分にとって都合の悪いこととなれば、
「社会が悪い、政治が悪い、時代が悪い、…、」と、
自分のことは棚に上げ、他責に転じるのが人間です。

「なんで俺ばっかりこんな目に…」
「どうして、いつもいつも、自分に嫌な役が回ってくるの？」
「なんで私ばかりが損をしなければならないのよ！」

それもこれも「自業自得」であり
「因果応報」であると説かれています。

蒔いた覚えがなくても、種を蒔いたからこそ芽が出て、
今の結果に繋がっているのです。

（続）

//==========//

●善い種を蒔く与える人、悪い種を蒔く奪う人②

人間関係は**「与えて与えられる」**か**「奪って奪われる」**かです。
「与える」という種を蒔けば、「与えられる」という実が生り、
「奪う」という種を蒔けば、「奪われる」という実が生ります。

なぜそうなるかというと、
「本当に相手に対して貢献できたのであれば、
　相手の心には自然と感謝の念が芽生え、
　感謝の念が芽生えてしまったなら、
　むしろ恩返ししない方が気持ち悪いから」
です。

つまり、相手に対する**「貢献」**が相手からの**「感謝」**となり、
相手からの**「感謝」**が相手からの**「恩返し」**となる、ということです。

もし、相手に対して貢献したにも関わらず、
相手から何の恩返しもされなかったとき、
これをどう解釈するかによって、
あなたが**「与える人」**なのか**「奪う人」**なのかが分かります。

相手が恩返ししないということは、
相手は感謝していないということです。これを素直に捉え、
「自分は相手に貢献できていない、つまり、
　そもそも自分は与えることができていない」
と解釈するのであれば、その人は**「与える人」**だと言えます。逆に、

「ふざけるな！この恩知らずめ！とっとと恩返ししろ！」
と憤るのであれば、その人は相手から奪おうとしている人であり、
「奪う人」だと言えます。加えて、奪う人というのは、
相手に依存しがちであり、なかなか自分から縁を切る決断はできないものです。
対照的に与える人であれば独立性が高く、潔く縁を切る傾向があります。

恩返し一つとっても、恩返しされるには理由があり、
恩返しされないにも理由があるのです。
「蒔かぬ種から芽は出ない」「蒔いた種からは必ず芽が出る」です。

（続）

//==========//

●善い種を蒔く与える人、悪い種を蒔く奪う人③

年を取れば取るほど、誰からも何も
言ってもらえなくなる、と言われています。

と言うのも、年を取れば取るほど**プライド**が高くなり、
会話するだけでも労力をかけさせられるからです。

年を取れば取るほど若い人からはそう見られているのだ、と
知っておくだけでも、年を取ったときに対処しやすくなります。

と言うより、そもそも人は、
相手の気分を害するようなことは言いたくないものです。

例え自分が職場の**上司**で、例え相手が**新入社員**であっても、
「やっぱりネガティブなことは言いたくないな…」と、
いくら強気を装っていても、心の中では抵抗を感じるものです。

新入社員を相手にするときですらそうなのですから、
自分より年上の人にものを言う人もそうはいません。
「関わりたくない！」というのが実際のところです。

もし意見を言って欲しいのであれば、
意見を言いやすいように雰囲気を作っておくとか、
意見を言わなければならない制度を構築しておくとか、
それ相応の努力が必要です。

そうした努力は一切していない、と言うのであれば、
年を取れば取るほど誰からも何も言われなくなってしまう、
というのも当然の話です。

そうして人は年齢に比例して**孤独**になっていくのです。

蒔かぬ種から芽は出ない、
意見を言ってもらうようにすることにも、
それ相応の種蒔きが必要なのですよ。

（続）

//==========//

●善い種を蒔く与える人、悪い種を蒔く奪う人④

「誰も、あなたの許可なく、
**　あなたを傷つけることはできない」**
という、何ともそれらしい格言があります。
では人はどういうときに傷つくのでしょうか？

人は求めたものが与えられなかったときに傷つきます。
例えば、告白してフラれたときとか、はたまた、
志望した会社から不採用を言い渡されたときとかです。

恋愛と就職は似ていると言われます。これは、
「求めたものが与えられなかったがゆえに傷つく」
という背景が同じだからでしょう。

逆に言えば、傷つくのが嫌なのであれば、
何も求めなければいい、ということになります。
求めたがゆえに傷つくのであれば、
求めなければ傷つくことはない、というわけです。

相手に無関心になっていればフラれても傷つきませんし、
別に不採用でもいいと思っていればショックも受けません。

求めさえしなければ傷つくこともないのです。
「誰も、あなたの許可なく、
あなたを傷つけることはできない」です。と言うと、

「いやいやいやいや、求めなければ、
何も得るものもないじゃないか！」
と思うかもしれませんが、実はそんなことはありません。

得たいのであれば与えればいいのであって、むしろ、
求めたからと言って必ずしも与えられるわけではありません。
相手が「与えたい」と思わなければ、与えられないからです。

与えられる人とは与えた人です。
そして傷つくのは求めたからです。

つまり、…、

「求めずして与えよ！」ということです。
これを**「無償の愛」**と言います。

無償の愛は攻めにおいても守りにおいても完璧です。
無償の愛は最強です。

安っぽい言葉に聞こえるかもしれませんが、
実践してみれば、この言葉の難しさを思い知らされます。
あなたは与える人でしょうか、奪う人でしょうか。

（完）

//==========//

Web サイト：
心を力学する　―原理・原則に基づく生き方を考える―

著者：
時無 和考(Tokinashi Kazutaka)